

四十二 オ月サマ

教材の趣旨

教材は仲秋の満月を主題とする。自然への愛着は、我が古來傳統の感情であり、趣味であつて、この感情趣味こそ先づ國語を通して啓培されなければならぬものである。といつて、この期の兒童に大人同様に客觀的な靜寂な自然が味ははるべきでない。そこにこの教材の主體的童話的な表現がある。

「日ガクレマシタ」の冒頭に次いで「オホシサマガ目ヲサマス」のである。既に自然は兒童の心を反映し、兒童の心を包んで擬人的に動いてゐる。やがて「ススキガオイデオイデ」をする。その招きに従つて「オ月サマガカホヲ」出す。それを歓迎するやうに、「ヤア、オ月サマガ出タ」といふ聲が流れる。コホロギがうれしうに鳴き出す。すべてのものに魂

があり、すべてのものが有心に結合して、人間的な劇を演じてゐる。かうした自然の童話化にこの文章の表現があるのである。

「ヤア、オ月サマガ出タ」

この聲の主が誰であるか。——もちろん附近にゐた子どもの聲に違ひないが、しかしそれはこの文の作者の叫ぼうとする聲でもある。敢へてその主を穿鑿するまでもなく、その場面に流れる如く通つた聲であり、その聲自身が月に向かつて挨拶をしたのである。

マルイ、マルイオ月サマデス。

アカルイ、アカルイオ月サマデス。

「マルイ」といひ、「アカルイ」といふ修飾語の反復とともに、「オ月サマデス」の述部も亦反復されてゐる。そこに兒童言語の表現形式があるとともに月の讚美がある。さうして、ここだけが現在形になつてゐるのは、ここに文の頂點があり、心の安住があるからである。

コホロギガ、ウレシサウニナイテキマス。

大人から見れば無心に鳴くコホロギも、児童の心には、美しいお月さまが出たから喜んでうれしさに鳴くのである。

この文章と不即不離に、次の「ウサギウサギ」の童謡が掲げてある。いはば「オ月さま」の餘韻であり、又見方によつては、前後対照して月二題の趣をなす。

古來傳承の童謡も數は多いが、この歌ほどふくらみを持ち、なつかしい旋律を持ったものは滅多にないであらう。名月の夜に、今も子どもたちはこの歌を異口同音に歌ひ、この歌の主題たる兎と同じやうに子どもはねまはる。さうして、それがとりもなほさず子どもらしい月の鑑賞に外ならないのである。

取扱の要點

挿畫(掛圖)を中心に、児童の體驗と結んで月に就いて話合をさせる。十五夜のお月さまはまるいこと、十五夜のお月さまの美しいこと、お月見にはどうするかといふこと、その他星や、すすきや、こほろぎに就いて話させてから、文章に導入する。

文章は靜かに讀ませる。發音を正し、文字語句を指導し、月の美しさを語るやうに讀ませて讀みを確實にする。

コトバノオケイコ六十四頁の

コンヤハ十五ヤオ月見デス。ススキヲカザリマセウ。オダンゴヲアゲマセウ。ワタタシタチモ、ウサギニナツテ、トンドリハネタリウタツタリシマセウ。

を讀ませ、お月見の夜のうれしさに就いて話させてから、「ウサギウサギ」の童謡を讀ませる。韻文であるから、韻律を讀みの上に生かすやうに指導することが大切である。

コトバノオケイコ六十四頁オホシサマ以下によつてカナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ六十五頁によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書寫又は書取をさせる。

注意すべきことば文字語句語法等

發音 「日ガ」の「ガ」、「オホシサマガ」の「ガ」、「森ノ上ガ」の「ガ」、「ススキガ」の「ガ」、「オ月サマガ」の「ガ」、「コエガ」の「ガ」、「アガリマシタ」の「ガ」、「コホロギガ」の「ギ」、「ガ」、「ウサギ」の「ギ」、「十五ヤ」の「ゴ」は何れも鼻濁音である。

「カホ」は「カオ」、「イフ」は「ユー」、「コエ」は「コエ」、「コホロギ」は「コーロギ」、「ウレシサウニ」

は「ウレシソ〜ニ」と發音する。

「ホシ」を「ホス」、「目」を「メー」、「サマシマシタ」を「サマスマスタ」、「ススキ」を「シシキ」、「オ月サマ」を「オチキサマ」、「スツカリ」を「シツカリ」、「十五ヤ」を「ジーゴヤ」又は「ズーゴヤ」などと訛る地方では矯正に力める。

「オ月サマが出タ」——地方によつて「デタ」を「デキタ」といふところがある。「デル」と「デキル」の區別をはつきり教へる必要がある。

文字 新字——森 オ月サマ (イフ)

語句語法 「オホシサマが、目ヲサマシマシタ」「ススキが、オイデオイデヲシテキマス」

「オ月サマが、カホラダシマシタ」「ゴホロギガ、ウレシサウニナイテキマス」等何れも擬人的な表現であり語法である。

「マルイマルイ」「アカルイアカルイ」「ウサギウサギ」といひ、「オ月サマデス」を二度くりかへし、「ナニ見テハネル」「十五ヤオ月サマ見テハネル」といふのは何れも同じ語の反復で、兒童の言語に一般的な形である。

「ナニ見テハネル」は問であり、「十五ヤオ月サマ見テハネル」は答であつて、この問の文と答の文がしつくりと一體になつて童謡が構成されてゐることも注意すべき。

である。

備考

自然の觀察「お月さま」「うさぎ」「ウタノホン上」「オ月サマ」「エノホン」「オツキミ」「オツキミノゴチソウ」と連絡して取扱に考慮する。

(以上九月)

四十三 モモタラウ

教材の趣旨

我が國童話の王座を占め、五大童話中の隨一たる桃太郎の説話を教材とする。

日本一の誇を黍園子に象徴し、孝行正義仁恕尙武・明朗進取——殆ど修身の徳目の大部分を無雜作に具體化したやうなこの童話である。よし自由主義時代にたまたま侵略的だといふ批評を蒙つたことはあつても、この日本的な童話の價値をどうすることもできなかつたので

ある。

この物語の起源が室町時代にありとする説は大體うなづけるところであるが、しかも地方に傳承する瓜子姫物語を通して竹取物語に溯り、更に伊弉諾尊の投げ給うた桃の實の故事に稽へれば、源流の遠さにはかり知られぬものがある。學者の穿鑿も至れり盡くせり、或は西王母の仙桃の故事に及び、黍園子を孔子家語に尋ね、犬猿雉を鬼門に向かふ申酉戌の變形だとする。

それらはともかくとして、童話としての興味はその内容の發展變化とともに、よく備はつた話説の形式にある。一少年と犬猿雉といふ弱小動物が、鬼といふ怪物の大軍と戦つて大勝利を獲る。小者が大なる者に對して勝つのは、あらゆる童話の形式であり興味である。更に犬と猿と雉が現れるに従つて、同じ敘述が三度くりかへされる反復も亦童話の形式であり興味である。兒童に對して取扱ふ場合には、説話の意味よりも、寧ろかうした形式の興味を考へておくことが大切である。

教材は十七頁に亘る長文である。これによつて讀む興味と讀破する力を養ふのが本教材の主たる目的であるが、幼い頃から祖父母たちに語り聞かされた物語であり、兒童の熟知する主題であるから、専ら文字文章を通して、目によつてこれを讀む喜びにひたらせることが取扱の中心となるべきである。

取扱の要點

本教材は非常な長文であり、しかも話の内容は、兒童が大體理解してゐることであるから、話合を省略してまづ讀ませるがよい。

通讀部分讀みを十分にさせ、文字語句を指導し、話合と相俟つて讀みを確實にする。コトバノオケイコ六十六頁の文章を讀ませ、それが本教材の要約であることに氣づかせ、又これを手がかりとして兒童に要領よく桃太郎の話させ、

コトバノオケイコ六十七頁の

ムカフ。カラ犬が來マシタ

オニノタイシヤウニムカヒマシタ

モモタラウラムカヘマシタ

によつて、「ムカフ」のカナヅカヒに注意させる。
また「オヂイサン オバアサン」と「ヲヂサン ヲバサン」とを比較させて、そのカナヅカヒに注意させる。

コトバノオケイコ六十八頁、六十九頁によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、適當に書寫又は書取をさせる。

發音 「オバアサンの「ガ」、「モモガ」の「ガ」、「ナガレテ」の「ガ」、「男ノ子ガ」の「ガ」、「キビダンゴ」の「ゴ」、「犬ガ」の「ガ」、「オニガシマ」の「ガ」、「サルガ」の「ガ」、「キジガ」の「ガ」、「タタカヒマシタガ」の「ガ」、「カケゴエ」の「ゴ」は、いづれも鼻濁音である。

「オヂイサン」は「オジイサン」、「オバアサン」は「オバアサン」、「キラウ」は「キロー」、「ウマレマシタ」は「ンマレマシタ」、「モモタラウ」は「モモタロー」、「ムカフ」は「ムコー」、「ヤウス」は「ヨース」、「タイシャウ」は「タイショー」、「カウサン」は「コーサン」、「カケゴエ」は「カケゴエ」と發音する。

「センタク」を「センダク」、「ヒロツテ」を「ヒロローテ」、「ヒラツテ」、「コシラヘテ」を「コサエテ」、「モラツテ」を「モローテ」、「ヌイテ」を「ヌイデ」、「人」を「シト」、「ヒキマス」を「シキマス」と訛る地方に於いては正しく發音するやうに指導する。

「クルマ」の「ル」を明瞭に發音するやうに指導する。

「桃」は「モモ」、「股」は「モモ」、「名ヲ」は「ナヲ」、「菜ヲ」は「ナヲ」のアクセントに注意する。

文字 新字讀替 — 來^キマシタ 中^{ナカ} 男^{オトコ}子^コ 勇^{ユウ}マシク 少^{オウ}シ 犬^{イヌ} 門^{カド} 戸^{カド} 刀^{カチ} 人^{ヒト}

(ラウ シャウ)

語句語法

「オヂイサントオバアサンガアリマシタ」の「アリマシタ」は、物語の敘述に使はれる語法であることに注意する。

「ドンブリコドンブリコ」は、擬聲語で、桃の流れるさまを具體的にあらはしてゐる。左の如き語句によつて敬語の使ひ方に注意させる。

キビダンゴヲコシラヘテクダサイ。

ドコヘオイデニナリマスカ。

一ツクダサイ。

モノヲトツタリイタシマセン。

ドウゾ、オユルシクダサイ。

本教材は、長文ではあるが、接續詞は殆ど使つてないから、叙述が、きびきびとはこばれてゐる。

備考

ヨイコドモ上の「ツヨイコ」の發展として取扱に考慮する。

ウタノホン「モモタラウ」、エノホン「モモタラウ」と連絡して取扱ふ。

四十四 カタカナ圖表

五十音濁音半濁音拗音の圖表を掲げる。

カタカナ圖表の取扱は、卷一の教材の進展に伴ひ、新しく提出される發音及び文字に關聯して、常にその發音及び文字が圖表中如何なる位置にあるかを注意せしむべきである。殊に發音の練習、訛音の矯正に際しては、五十音圖の行と列とに即して取扱ふ心構が大切である。例へばいはゆるイエの混同、シス、チツ、ニネ、ヒフ、ミメの混同の如きは、イ

列・ウ列・エ列の關聯に於いて發音させることによつて正しい練習をさせることができ、又訛音もこれによつて矯正することができるのである。又ヒ・シの混同、フ・フェの訛音、デ・レ、ド・ロ等の混同の如きは、ハ行・ラ行・ダ行等、行の關聯に於いて正しい練習をさせることを期すべきであり、キ・リ等の發音の曖昧なのは、イ列と、カ行・ラ行と、行・列兩方面から正しくすることが大切である。かくの如く、發音の基礎的練習には常に五十音圖を頭に置いて適當に取扱ふことを期すべきである。

以上は主として卷一の教材の發展に伴ひ、隨時になすべき取扱に就いて述べたのであるが、特に清音に關する文字の提出の終つた時、濁音に關する文字の提出の終つた時、及び卷一の教材の全部を終つた時、その都度この圖表を利用することによつて、音韻及び文字の全體的練習をなさしめる。その際單にアイウエオ、カキクケコ等、行の取扱のみに終らず、アカサタナハマヤラワ、イキシチニヒミイリキ等列の取扱を十分に行ひ、殊に清音の各列は朗讀、暗誦、暗寫せしめるまでに反復する

ことが大切である。

拗音に至つては、卷一の教材に於いて實際に提出せられるものは頗る少いから、専ら圖表によつて取扱を擴充しなくてはならない。唯ここに注意すべきは、拗長音に至つては種々のカナヅカヒがあつて、必ずしもこの圖表の表記法を基礎としないことである。

なほ拗音圖表中に、クッ及びグッを併せ掲げることもあるが、その音はカガを標準とする以上、表記は寧ろカナヅカヒに屬するから、ここには掲げないことにした。

新出讀替文字一覽(ヨミカタ 一)

〔左傍ニ——ヲ附シタモノハ讀替文字デアル。ナホ()ヲ附シタモノハ讀替文字ト見ナス。〕

頁	行	新出讀替文字	頁	行	新出讀替文字
六	一	ア	八	二	コ
七	一	イ	九	一	マ
八	一	カ	十	四	ヌ
		ハ			ン
		ヒ			ウ
		ト			ル

			二〇		十九			十八
三			一	三	一	三	二	一
キ	ケ	ヤ	(ユフ)	ユ	リ	ピ	モ	ナ
								ラ

二 三					二 三		二	二 〇
一		三	二		一	三	一	三
ム	ホ	キ	(イツテ)	ダ	ゴ	(ヤウ)	ツ	ワ
								ニ

二二三

	十四		十三			十二		十
三	一		一		二	一		二
								一
ヨ	ガ	テ	チ	メ	ス	ヘ	ザ	バ
								タ

					十七		十六	十五
	四	二	一	三	二	一	三	一
セ	ミ	ク	フ	ソ	オ	デ	ロ	レ
								シ

二二三

三五		三三							三三
四	三	四	三	一	六	五	四	二	一
(ガウ)	(ホ)	(シヨ)	(ジャ)	ホ	ブ	ボ	ブ	ネ	ペ
三七		三六							三五
七	三	一		七		六			五
上	ツ	木	ゼ	六	五	四	三	二	一

二七	二五		二四						二三
四	一	五	五		二	七	五		三
ギ	(カウ)	ジ	グ	エ	パ	エ	ズ	ヲ	ベ
三一			三〇		二九				二八
五	四	二	一	四	三		二		一
ゾ	ド	(タウ)	ビ	(シヤ)	(ハ)	(サウ)	(ヒ)	(ヘ)	チ

五九	五八	五七		五六	五五	五四		五二	五一
三	五	四		一	三	四	六	二	八
(ハウ)	(チャウ)	入レヨウヨ	出テ	下	(チヨ)	小ミチ	(カフ)	日	雨
七三	七二			六八		六三			五九
四	一	八	五	三	五	一		五	四
(ラウ)	来マシタ	(イフ)	オ月サマ	森	旧本	(ヒヨ)	見エマス	目ダマ	(ニヨ)

		四三	四二		四〇	三九			三八
	二	一	六	五	三	二	四		三
八	七	石	(セウ)	五本	山	アマノ川	ゲ	(チャウ)	小サナ
五〇	四九	四八			四六	四四			四三
一	一	八	七	六	五	六	四		二
空イツパイ	(キヤウ)	松	花	水	草	大キナ	手	十	九

七三	七五	七六	八一	八三
五	六	七	一	二
中カラ	男	子	勇マシク	少シ
			犬	門
			戸	刀
				(シャウ)
八四				
五				
人				

上	川	手	草	雨	出
一(又ハ)一一	ノ一一	一一一	一ノ日十	一フ一一	一ムム
來	男	勇	門		
双一八(又ハ)十ム八	四ニフノ	マ四ニフノ	フニフニ		

運筆順序 (特に筆順の誤り易いもの、又は二様以上あるものに就いて、藝能科習字と連絡しできるだけ統一して掲げた。)

鉛筆による書き方指導上の注意

姿勢

- 一、椅子にやや浅く腰をかけ、兩脚は少し開く。
- 一、下腹を前に出し、尻を引いて脊柱を正しくする。
- 一、胸を机におしつけぬやうにする。
- 一、左手を紙上にのせ、左腕を前に張らぬやうにする。

執筆並びに運筆

- 一、右腕は軽く机上にのせ、脇の下を開いて腕を伸ばす。
- 一、低學年では掌の右側を紙につけて書くが、高學年に及んで次第に軽くつけ、遂には手首のみをつけて運筆するやうに指導する。
- 一、四本の指は離れぬやうに密着させる。
- 一、鉛筆と紙面との角度は、右後へ六十度乃至七十度とする。
- 一、鉛筆は中指の爪のつけ根のあたりから、食指の根本にかける。

その他

- 一、鉛筆は軽く持つて、あまり下を持たぬやうにする。
 - 一、運筆は毛筆の如く強弱緩急をつけず、低學年に於いては字形を主とし、上達するに随つて速度を加へ緩急をつける。
- その他
- 一、鉛筆は直径の二倍乃至三倍の斜面に削り、芯はなるべく尖らせないで使ふやうに躑ける。
 - 一、鉛筆の芯をなめるくせをつけないやうにする。

ヨミカタ一の發音

(カギゲゴは鼻濁音を示す。)

アカイ アカイ アサヒ アサヒ

ハト コイ コイ

コマイヌサン ア コマイヌサン ウン

ヒノマルノ ハタ パンザイ パンザイ

ヘータイサン ススメ ススメ

チテ チテ タ トタ テテ タテ タ

ガー ガー アヒル ヨチ ヨチ アヒル

ハシレ ハシレ シロ カテ アカ カテ

ココマデ オイデ ソロソロ オイデ

フー フー フー フクレタ フクレタ カミフーセン

ソラガ ハレタ ウシガ ナク モート ナク

ピーチク ピーチク ヒバリガ アガル テンマデ アガル

ユーヤケ コヤケ アシタ テンキニ ナーレ

ワタシガ アルク オツキサマガ アルク

オハヨー ゴザイマス。 イタダキマス。 イツテ マイリマス。

ホンダ イサムサン。 ハイ。 ワタナベ マサオサン。 ハイ。
スズキ ハナコサン。 ハイ。 ハヤシ ハルエサン。 ハイ。

ホンダサンガ、 ラッパノ エ オ カキマシタ。

ワタナベサンガ、 グンカンノ エ オ カキマシタ。

スズキサンガ、 サクラノ エ オ カキマシタ。

ハヤシサンガ、 フジサンノ エ オ カキマシタ。

センセー、 サヨーナラ。

オカーサン、 タダイマ。

ヒコーキ、 ヒコーキ、 アオイ ソラニ ギンノ ツバサ。 ヒコーキ、
ハヤイナ。

イサムサンガ、 オジサンノ トコロエ、 オツカイニ イキマス。
シロモ、 ヨロコンデ ツイテ イキマス。

モシ モシ、 キヌコサン デスカ。

ハイ、 ソー デス。

ワタクシワ ハナコ デス。 イマ、 ハルエサンガ、 キテ イラッシャ
イマス。 アナタモ、 アソビニ イラッシャイマセンカ。

ハイ、 アリガトー。 スグ マイリマス。

ゴメンクダサイ。

キヌコサン デスカ。ヨク イラッシャイマシタ。ドーズ、オアガ、
リクダサイ。

ペンキ キツネ ネコ コブタ タンポポ ポンプ プカプカ ドン、
ドン

カクレンボスル モノ、ヨットイデ。

ジャン ケン ポン ヨ、アイコ デ ショ。

モー イー カイ。 マーダ ダ ヨ。

モー イー カイ。 マーダ ダ ヨ。

モー イー カイ。 モー イー ヨ。

キ オ ツケ。 ミギエ ナラエ。 ナオレ。 パンゴー。

イチ、ニ、サン、シ、ゴ、ロク。

アメガ ヤミマシタ。 スズシー カゼガ フイテ キマス。

キノ ハ ガ、 ソヨソヨ ウゴイテ イマス。

イケニ、 フネオ ウカベマシタ。

フネニワ、 ホ ガ アリマス。

カゼオ ウケテ、 ハシリマス。

ミズノ ウエオ、 ズンズン ハシリマス。

ホー ホー、 ホタル コイ。

チーサナ チョーチン サゲテ コイ。

ホー ホー、 ホタル コイ。

ホシノ カズホド トンデ コイ。

タナバタノ アマノガワ。
 ピカピカト オホシサマ。
 ニコニコト オホシサマ。

ニ―サント フタリデ、ハコニワオ ツクリマシタ。
 ツチオ タカクシテ、ヤマオ ツクリマシタ。
 ヤマノ ソバニ、カワオ ツクリマシタ。
 ヤマニ、チリサイ キオ ゴホン ウエマシタ。コケモ ツケマシタ。
 カワノ フチニ、イシオ ナラベマシタ。ハシモ カケマシタ。
 スツカリ デキテカラ、オジーサンニ ミテ イタダキマシタ。
 オジーサンワ、

「ホホー、コレワ ヨク デキタネ。」
 ト イツテ、ホメテ クダサイマシタ。

ココワ、ドコノ ホソミチ ダ。
 テンジンサマノ ホソミチ ダ。
 ドーゾ、ト―シテ クダサイナ。
 ヨーノ ナイモノ、ト―シマセン。
 テンジンサマエ マイリマス。
 ソレナラ、ト―シテ アゲマシヨ―。

オミヤノ イシダン、イチニサン、
 シーゴ―ロクシチ、ハチクジユ―、
 ニジユ―ゴダンデ ゴシンゼン。
 ニド オジギシテ、テオ ウツテ、
 モヒトツ ウツテ、オジギシテ、
 ワタクシタチワ ゲンキ デス。

オトーサング、

「アサガオガ サイタヨ。」

ト オツシヤイマシタ。

イッテ ミルト、ハチウエノ アサガオガ、フタツ サイテ イマシタ。

ムラサキノ オーキナ ハナ デス。

ボクワ、クレヨンデ シャセーオ シマシタ。

ラジオノ ピヤノガ、キコエテ キマシタ。

「モー ジキ オボン、デスカラ、オハカノ ソージニ イキマシヨ。」

ト、オカーサング オツシヤイマシタ。ネーサント フタリデ、ツイテ イキマシタ。

オハカノ マワリノ クサオ トツタリ、オハカノ イシオ ミズデ

アラツタリシマシタ。

オハカノ ソバノ ハギワ、アカイ ハナガ フタツ ミツ サイテ イマシタ。

「ハギワ、オジーサンノ オスキナ ハナ デシタヨ。」

ト、オカーサング オツシヤツテ、ソノ ネモトニ、ミズオ オカケニ ナリマシタ。

イモートオ ツレテ、ノハラエ ハナオ ツミニ イキマシタ。

ハジメニ、ナデシコノ ハナオ ミツケマシタ。

ツレカラ、オミナエシノ ハナオ ミツケマシタ。

マツノ キノ カゲニワ、キキョーノ ハナモ サイテ イマシタ。

イモートワ、キキョーノ ツボミオ ソット ツマンデ、

「カワイラシーネ。」

ト イーマシタ。

ワタクシタチワ、テニモチキレナイホドツンデ、ウチエカエリマシタ。

クロイクモガ、ソライツパイニヒロガリマシタ。

キノハガ、ザワザワトオトオタテマシタ。

オーツブノアメガ、オチテキマシタ。

オカーサンワ、イソイデアマドオオシメニナリマシタ。

ピカリトヒカリマシタ。

オーキナカミナリガ、ゴロゴロトナリマシタ。

ワタクシワ、オカーサントイツシヨニアマドオシメマシタ。

アメガ、ザーツトフツテキマシタ。

ユーダチガヤミマシタ。

アタリガアカルクナツテ、ヒガサシテキマシタ。

セミガ、ウレシソーニナキダシマシタ。

ムコーノソラニ、オーキナニジガデマシタ。

ワタクシワ、オカーサンオヨビマシタ。

「マー、キレーナニジダコト。」

ト、オカーサングオツシャイマシタ。

アリガナランデ、セツセトトール。

アツイヒナカノコミチオトール。

マジメナカオシテ、セツセトトール。

「ヤ、コンニチワ。」

「コンニチワ。」

「オジギシテ、ソレカラダマツテ、セツセトトール。」

カワバタノスナオホルト、シタカラミズガデテキマス。

イサムサント マサオサンワ、スナオ ホツテ、イケオ ツクリマシ
タ。

ハジメワ ミズガ ニゴツテ イマシタガ、ダンダン キレーニ ス
ンデ イキマシタ。

「サカナオ トツテ イレヨーヨ。」

ト、イサムサンガ イーマシタ。

フタリワ、カワエ ハイッテ、サカナオ サガシマシタ。

「メダカガ ニヒキ トレタ。」

ト、マサオサンガ イーマシタ。

「ボクワ、エビト ドジョーオ トツタ。」

ト、イサムサンガ イーマシタ。

イケエ ハナスト、メダカワ ゲンキヨク オヨギマス。

ドジョーワ、ソコノ ホーエ シズンデ、トキドキ ニヨロリト ウ
ゴキマス。

エビワ スキトーッテ、メダマダケガ、クロク ミエマス。

スイスイ オヨイデ イク ウチニ、ドコエ イッタカ、ミエナク

ナル コトガ アリマス。

メダカサン、メダカサン、

オーゼー ヨツテ ナンノ ソーダン。

ア、ミンナガ ワット ニゲテッタ。

トビガ、ソラオ トンデ イマシタ。

イケニ イル カメガ キキマシタ。

「トビサン、ナニガ ミエマスカ。」

「ヒロイ、ヒロイ ウミガ ミエマス。」

「コノ・イケヨリ ヒロイノ デスカ。」

「ドーシテ ドーシテ、ウミワ、ソラノヨーニ ヒロイノ デス。」

コー イッテカラ、 トビワ ウタイマシタ。

ウミノ ムコーエ フネガ イク、 ピーヒヨロロ。

ウミノ ムコーカラ フネガ クル、 ピーヒヨロロ。

ニッポンワ ウミノ クニ、 ピーヒヨロロ。

シタキリスズメ、 オヤドワ ドコダ。

シタキリスズメ、 オヤドワ ドコダ。

「オジーサン、 マー、 ヨク オイデクダサイマシタ。」

「サー、 ドーゾ オアガリクダサイ。」

スズメワ、 オーヨロコビデ、 オジーサンオ オザシキエ トーシマシ

タ。

スズメガ、 オジーサンニ イロイロ ゴチソーオ シマシタ。

オーゼーデ、 ニギヤカニ オドリマシタ。

オミヤゲニ ツズラオ アゲマシタ。

オジーサンワ、 タイソー ヨロコビマシタ。

「サヨーナラ。」

「サヨーナラ、 ゴキゲンヨー。」

「ドーゾ、 マタ オイデクダサイ。」

ヒガ クレマシタ。

オホシサマガ、 メオ サマシマシタ。

モリノ ウエガ、 アカルク ナリマシタ。

ススキガ、 オイデオイデオ シテ イマス。

オツキサマガ、 カオオ ダシマシタ。

ドコカデ、

「ヤー、 オツキサマガ デタ。」

ト ユー コエガ シマシタ。

オツキサマワ、 スツカリ モリノ ウエニ アガリマシタ。

マルイ、マルイ オツキサマ デス。
アカルイ、アカルイ オツキサマ デス。
コーロギガ、ウレシソーニ ナイテ イマス。

ウサギ、ウサギ、ナニ ミテ ハネル。
ジューゴヤ オツキサマ、ミテ ハネル。

ムカシ ムカシ、アルトコロニ、オジーサント オバーサング アリマシタ。
オジーサンワ、ヤマエ シバカリニ、オバーサンワ、カワエ センタ。
クニ イキマシタ。
カワカミカラ、オーキナ モモガ、ドンブリコ ドンブリコト ナガレテ キマシタ。オバーサンワ、ソノ モモオ ヒロツテ、ウチエ カエリマシタ。

オジーサング ヤマカラ カエツテ クルト、オバーサンワ、ソノモモオ ミセマシタ。
オジーサンワ、
「コレワ コレワ、メズラシー オーキナ モモダ。」
ト イーマシタ。
オバーサング、モモオ キロート シマシタ。
スルト、モモガ フタツニ ワレテ、ナカカラ オーキナ オトコノコガ ンマレマシタ。
オジーサンモ オバーアサンモ、タイソー ヨロコビマシタ。オジーサンワ、モモタロート ナ オツケマシタ。
モモタローワ、ダンダン オーキク ナツテ、タイソー ツヨク ナリマシタ。
アルヒ、モモタローワ、オジーサント オバーサンニ、
「オニガシマエ オニタイジニ イキマスカラ、キビダンゴオ コシ」

ラエテ クダサイ。」

ト イーマシタ。フタリワ、キビダンゴオ コシラエテ ヤリマシタ。

モモタローワ、イサマシク デカケマシタ。

スコシ イクト、ムコーカラ イヌガ キマシタ。

「モモタローサン、モモタローサン、ドコエ オイデニ ナリマスカ。」

「オニガシマエ オニタイジニ。」

「オコシニ ツケタ モノワ、ナン デスカ。」

「ニッポンイチノ キビダンゴ。」

「ヒトツ クダサイ、オトモシマシヨ。」

モモタローワ、イヌニ キビダンゴオ ヤリマシタ。イスワ、ケライ

ニ ナツテ、ツイテ イキマシタ。

マタ スコシ イクト、ムコーカラ サルガ キマシタ。

「モモタローサン、モモタローサン、ドコエ オイデニ ナリマスカ。」

「オニガシマエ オニタイジニ。」

「オコシニ ツケタ モノワ、ナン デスカ。」

「ニッポンイチノ キビダンゴ。」

「ヒトツ クダサイ、オトモシマシヨ。」

サルモ、キビダンゴオ モラツテ、ケライニ ナリマシタ。

マタ スコシ イクト、コンドワ キジガ キマシタ。

「モモタローサン、モモタローサン、ドコエ オイデニ ナリマスカ。」

「オニガシマエ オニタイジニ。」

「オコシニ ツケタ モノワ、ナン デスカ。」

「ニッポンイチノ キビダンゴ。」

「ヒトツ クダサイ、オトモシマシヨ。」

キジモ、キビダンゴオ モラツテ、ケライニ ナリマシタ。

モモタローワ、イヌト、サルト、キジオ ツレテ、オニガシマエ ワ

タリマシタ。

オニワ、モンオ シメテ、マモツテ イマシタ。

キジガ、 トンデ イツテ、 ウエカラ テキノ ヨースオ ミマシタ。
サルワ、 スルスルト モンオ ノボツテ、 ナカカラ モンノ トオ
アケマシタ。

モモタローワ、 イヌト イツシヨニ セメコミマシタ。 キジワ、 トビ、
マワツテ オニノ カオオ ツツキマシタ。 サルト イヌワ、 ヒツカ、
イタリ カミツイタリシマシタ。

モモタローワ、 カタナオ スイテ、 オニノ タイショーニ ムカイマ
シタ。

オニノ タイショーワ、 チカライッパイ タタカイマシタガ、 トート
ー マケマシタ。

オニワ、 ミンナ コーサンシマシタ。

「コレカラワ、 ヒトオ クルシメタリ、 モノオ トツタリ イタシマ
セン。 ドーゾ、 オユルシクダサイ。」

ト イーマシタ。

モモタローワ、 オニオ ユルシテ ヤリマシタ。

オニワ、 イロイロノ タカラモノオ サシダシマシタ。

モモタローワ、 タカラモノオ モツテ、 オニガシマオ タチマシタ。

タカラモノオ ツンダ クルマオ、 イヌガ ヒキマス。 サルガ アト、

オシオ シマス。 キジガ ツナオ ヒキマス。

「エンヤラヤ。 エンヤラヤ。」

ト、 カケゴエ イサマシク カエツテ キマシタ。

オジーサント オバーサンワ、 タイソー ヨロコンデ、 モモタローオ

ムカエマシタ。

綴り方指導要項

指導の發展段階

- 第一期 兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。
- 第二期 兒童の見聞する事象、日常の行動などに就き、見方、考へ方を指導して生活を豊富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。
- 第三期 文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多様ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。
- 第四期 第三期に準じてこれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豊かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

初等科第一學年

一 指導要項

言語發表の指導

○兒童の日常使用する言語による發表を盛ならしめる。

- (イ) 日常の生活に於ける獨り言、挨拶、會話など、素朴なことばを取りあげ、それを手がかりとして自由に發表する態度を養ふ。
- (ロ) 言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、氣長に適當な方法を講じ、興味と自信を持たせて積極的に語るやうにする。
- (ハ) 方言、訛語、語法上の誤などは、順次これを矯正して正しい國語が使へるやうに導く。これも指導上氣長な辛抱が必要である。

○日常生活の中から、何を發表するか、それを發見し把握する仕方を懇切に指導する。

(イ) 日常の生活に於いて、見たこと、行つたこと、考へたことなどを發表させる機会を多くする間に、一定の事柄を中心として發表する力を得させる。

(ロ) 話合、野外遊歩、見學などに際し、その場で設問すること、提示した繪畫や實物、兒童の描いた繪などに就いて説明させること、學校、家庭、その他に於ける遊びや學習や、飼育、工作、栽培などの經過を話させることによつて、次第にまとまつた發表をさせる。

(ハ) 進んでは、各自の生活を思ひ起させ、記憶をたどつて、雑多な事象の中から感覺的に印象づけられたもの、興味をそそられたもの、感動したことなどを捉へる練習をさせる。

これが練習にあつては、初めは、ごく單純素朴なものを取りあげ、次第に複雑豊富なものに向かはせることが大切である。

これは綴り方にはいる最も根本的な方法であるから、十分に基礎づけておかなければならない。

○他教科他科目の指導中でも、言語發表の練習をさせる。

(イ) 少しでも多く言語發表をさせ、生活を反省させ、記憶を喚びさまし、題材を發見し把握する契機を與へる。

(ロ) 言語發表をしようとする兒童は、事柄を時々刻々に思ひ出しながら、ことばにするのであるから、必ずしも整然たる筋を求めることなく、その發表欲を満足させることが大切である。

文章表現の指導

○言語表現から文章表現にうつる間に、過渡的な方法として繪畫を描かせる。

(イ) 話す事柄を日常生活の中から、發見し、發表することだけでも、兒童にとつてはかなり程度の高い精神的な作業である。これを文字に移すのは更にむづかしいことである。

この困難な仕事を、躓くことなくさせるために、いろいろ工夫して善導することが大切である。

- (ロ) 繪を描かせることは有効な方法の一つである。それは繪を描くことによつて、ただ事物を羅列することから、進んで、物と物、事件と事件との関係や秩序が組立てられるやうになるからである。更に繪は何枚か續けて描くことにより、時間的な展開を示すことができ、事物の動きを具象化することが會得されるのである。
- (ハ) 繪を描かせて、それをことばで説明させたり、或は文字を書き入れさせたりして表現能力を養ひ、次第にこれを綴り方に導く。

○題材をなるべく廣く取るやうに導く。

- (イ) 日常の生活に於いて、見たこと、行つたこと、考へたことなどを題材として文章に表現するやうに導く。日常の遊びや仕事や學習や作業などを、そのまま記述することが綴り方であるといふ氣輕な心持で綴り方に向かはせ、生活のあらゆる機會を利用して書く事柄の具體的な指導を行ふ。
- (ロ) 文章表現への自發的な興味を喚起するやうに導く。

日記・手紙詩などのやうな形で記述させることによつて、綴る興味を昂める。

兒童相互の綴り方を讀みあひ、又短い文、詩など適當な文例を示し、興味とともに兒童の能力を引出す機會を多くする。

- (ハ) 他教科他科目との緊密な聯關を保ち取材の範圍を廣くする。たとへば理數科に於ける草花や動物などの觀察、栽培、飼育等と連絡して生活の興味と表現との自然な結びつきをはかる。

○思ふままに記述をさせ書寫能力を養ふ。

- (イ) とりたてて、構想や腹案等の指導を行はず、經驗の順序によつて、自由に記述させる。
- (ロ) 用語は兒童の生活語から出發し、次第に正しい國語の表現に向かはせる。

綴り方は方言だけで書けるものではない。方言だけで書けといへば、かへつて兒童の筆は澁つてしまふ。讀み方、その他の讀物、話し方

その他の言語生活に於いて、正しいことばづかひや正しいひまはしをよく練習させなければならぬ。

誰にもわかるやうにはつきりといひあらはし書きあらはすやうにさせる。そのために、自分の文を度々読みなほす習慣を養ひ、訂正の仕方を教へる。

(ハ)表記の基礎的指導を行ひ、書き方と關聯して書寫能力を練る。

カナヅカヒ句讀點などは讀み方に準ずることを建前として指導する。

書き方と關聯して、文字を正しく書き得るやうにし、且氣輕に鉛筆が持てるやうに練習する。

二 指導要項例

第一學期

○簡単な話合

- (イ)挨拶や應答がはつきりいへるやうにする。
- (ロ)見たこと、したこと、聞いたこと、考へたことなどの話合をさせる。
- (ハ)おもしろい話、をかしい話、珍しい話などを、話合からとりあげるやうにする。

○生活の言語發表

- (イ)野外遊歩、見學など、その場で問答したり、又見聞したことに就いていはせたりする。
- (ロ)提示した實物や繪畫、兒童の描いた繪などに就いて、いろいろの發表をさせる。
- (ハ)遊び、學習、飼育、工作、栽培などの經過を發表させる。

○發表をとりあげる

- (イ)兒童の發表した面白い個性味のある短い話を書きとめておいて、みんなに聞かせてやる。

(ロ) 兒童の獨り言や、誰かに言つたことや、説明したことなどを、その時の様子と結びつけてみんなに話してやる。

○繪による發表

- (イ) 日常の生活におけるいろいろのことを、繪で發表させる。
- (ロ) 繪日記・紙芝居など、連続した繪話を作らせる。
- (ハ) 短いことばを書き入れ、繪とき、繪入りの文を書かせる。

○發聲及び表記の基礎的練習

- (イ) 話合や言語發表における兒童のことばをとりあげて、發聲の基礎練習をする。
- (ロ) 興味ある短い文を選んで、その視寫・聽寫をさせる。

第二學期

○夏休の繪日記

(イ) 學級で展覽し、お互の作品をよく見るやうにしむける。

(ロ) 題材のとらへ方のよい作品をほめて、取材の仕方を指導する。

○行動の叙述

- (イ) 自分のしたことを、お話するやうに書かせる。
- (ロ) うちの人のことや、身のまはりの自然のことにもふれて書くやうにする。しひてまとまつた話にさせなくてもよい。

○發表をとりあげる

- (イ) 第一學期に準ずるものをとる。
- (ロ) とりあげたものを適當な方法によつてよく讀ませ、題材のとらへ方やあらはし方のちがひに注意させる。

○短い文の視寫・聽寫

- (イ) 書き方と聯絡して書かせ、特に促音濁音・長音・句點字配りなどに氣をつけさせる。
- (ロ) 書寫は、まづよいものをほめることによつて、自發的につとめるやうに仕向ける。

○郵便つっこ

- (イ) 役割をきめて郵便ごつこをさせる。
- (ロ) 生活の實際を通信しあふやうにする。

○紙芝居の製作

- (イ) 繪と文とを使つて、連続した表現をさせる。
- (ロ) 想像によるもの、自分の行動をあらはすもの、自然をうつすものなどを書かせる。

○冬休の綴り方

- (イ) 戦地の兵隊さんへあてた年賀状の指導をする。
- (ロ) 繪日記の書き方を指導する。

第三學期

○冬休の繪日記

- (イ) 第二學期夏休後の方法に準ずる。

(ロ) 題材のとらへ方のほかに、あらはし方のよい作品をほめるやうにする。

○遊びを書かせる

- (イ) 正月の遊び、かくれんぼなど、遊びのおもしろさを中心にして、自分の行動をくはしく書かせる。
- (ロ) 對話を入れること、對話にかぎをつけること、句點を正しくうつことを指導する。

○うちの人

- (イ) 親しみの心で、うちの人のことをくはしく書かせる。
- (ロ) その人の様子のよくあらはれたところをほめるやうにする。

○手紙の文

- (イ) 兵隊さんから來た手紙などを讀みあふやうにする。
- (ロ) 兵隊さんや病氣の友だちによびかけた文を書かせ、手紙を書く準備をする。

○詩

- (イ) 感動したことがらを、短いことばで書かせる。
- (ロ) 改行・分節などには、あまりこだはらず、感じたままに表現させるやうにする。
- (ハ) 程度にあつたよい作品を鑑賞させる。

○作品の朗讀

- (イ) 自分の書いたものを、お話のやうに讀むやうに仕向ける。
- (ロ) 人の綴り方を喜んで聞くやうに導く。

○自分でなほすことの練習

- (イ) 自分の綴り方を何べんも讀みなほすやうにさせる。
- (ロ) 書き足りないところを見出して、それを補ふ方法を教へる。

○一年間の綴り方

一年間の綴り方をまとめさせ、それをよく讀みかへして、生活を反省させる。

三 参考文題

(次に掲げた文題は指導上の参考に供するものである。これを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。)

第一學期

四月

オウチノコト

おうちの人、赤ちゃん、おもちゃ、犬、猫、鶏、牛、馬、花などに就いて氣樂に話させる。

ガクカウノコト

はじめて學校へ來た時のこと、みんなとの遊び、先生のこと、教室のことなど。

ツウガクノコト

學校に來る途中で見たり、聞いたこと、誰といつしよに來たか、どんなことをお話したかなど。

テンチャウセツ

式のこと、國旗のこと、先生のお話のことなど。

五月

エンソク

前の晩のこと、その日の朝のこと、途中のこと、お辨當のことなどを順に話させる。

ウンドウクワイ
オセツク
ハナトコトリ

〔大體「遠足」に準じる。自分のしたこと、人のしたことなど。かしは餅、私のうちの鯉のぼり、學校の鯉のぼりなど。お節供に何をして遊んだかなど。好きな花、朝顔の芽生え、好きな小鳥、小鳥の鳴き聲などに就いて。その他小動物など。〕

六月

オテツダヒ
アソビ
アメ
ヒカウキ
エホンノハナシ

〔お使ひ、子守、庭はきのお手傳ひ、水くみなどに就いてくはしく話させる。ままごと、かくれんぼ、兵隊ごっこ、なはとび、水遊びなど、その時の様子を誰にもわかるやうに話させる。雨でこまつたこと、雨の日にうちで遊んだこと、雨の日の通學など。飛行機を見た時のこと。どんな形をしてゐたか、どんな音がしたかなど、その時の感動をそのままにいひあらはさせる。またおもちやの飛行機をとばしたことなど。繪本に書いてあつた繪の話などを中心に。買つてもらつた時、いただいた時のことなどをいつしよに話させてもよい。〕

七月

タナバタ
ガクゲイクワイノ
コト
オボン
ソトデアソソダコ
ト
オマキリシタコト
コノゴロノヤサイ

〔うちの七夕祭、學校の七夕祭など。天の川のことなどに觸れて話させる。何が一番おもしろかつたか。出演したにいさん、ねえさん、お友だちのこと、劇、お話などを思ひ出して話させる。うちのおぼん、おぼんにしたこと、お墓参りなどに就いて、經驗を中心に。水泳、魚釣り、箱庭づくり、花つみ、蟬とり、線香花火など、行動を中心にして話させる。神社、お寺にお参りした時のこと。いつ、誰とどんな日に。どんなにしてをがんだかなどをくはしく。島または庭さきのいんげん、きうり、なすなどに就いて。〕

第二學期

九月

ナツヤスミノオハ
〔夏休中の生活を思ひ思ひに話させ、その中のあるものを記述させる。書いた繪を整理して説明を加へさせる。〕

アラシノ日
〔あらしの日のうちのこと、庭の草や木のこと、たんぼのこと、通學途中の見聞など。〕

ムシ
〔とつた虫、見た虫、虫の鳴き聲など。いなごとり、ばつたとりなど、興味の中に觀察を織り込んで書かせる。〕

オ月見
〔お月見の用意、いろいろなそなへもの、お手つたひなど、うちの生活に聯關させて。〕

ガクカウエン
〔このごろの學校園に就いて書かせる。繼續觀察をやや加へ日記風に書かせてもよい。〕

十月

エンソク
〔途中の見聞を書かせる。断片的な短いことばで詩の形になつてもよい。〕

山ノボリ
〔時間的に全體を記述させる。或は自分のしたことを中心に書かせてもよい。〕

オマツリ
〔お祭の來るまでのこと、前の晩のこと、お参りした時の様子、お祭の御馳走、お小遣のことなど、くはしく。〕

タンボノヤウス
〔いねかり、いねこき、おちばひろひなど、自然の様子といつしよに書かせる。〕

キイタハナシ
〔友だちとの話、うちの人から聞いたこと、おもしろかつたラジオの話、讀んだもののあらすぢなど、友だちに話すやうに。〕

十一月

メイヂセツ
〔式の様子、學校から歸つて遊んだこと、天氣のこと、明治節に就いて聞いたお話、菊の花のことなど。〕

コノゴロノクダモノ
〔柿、栗、りんご、みかん等、栗ひろひ、柿もぎ、みかんとり、いもほりなどに就いて書かせてもよい。〕

ヘイタイサンニ
〔特に慰問文の指導としないで、うちの様子、村や町の様子、學校の様子などをお話の形式で書かせる。〕

エ日キ
〔自然の觀察を繪日記に書かせる。雲の日記、コスモスの日記、雞の日記など。〕

エバナシ
〔讀んだ話を紙芝居風に書かせ、その説明を書かせる。〕

十二月

冬ノアサ

早起、ラジオ体操などに聯關させて、寒い冬の朝の自然や行動を書かせる。

カヒモノ

おとうさんおかあさんといつしよに買物をしたこと、自分で物を買つたこと、買物ごつこなどの體驗を書かせる。計算の興味を附隨させて。

シモヤケ

自分のしもやけ、友だちのしもやけなど、手袋や足袋、火鉢などに聯關させて書かせる。

モチツキ

お正月の用意、すすきはき、障子のはりかへ、餅つき、その他楽しいお正月を待つ氣持を行事に聯關させて書かせる。

第三學期

一月

グワンジツノアサ(元日の朝の行事を體驗のままくはしく書かせる。

エ日キ

お正月の三日間、或は五日間の生活の中から、特におもしろかつたことを繪と文で書きあらはす。

オ正月ノアソビ

たこあげ、はねつき、すごろく、相撲、雪合戦など。

シャシン

寫眞をとつた時のこと。家にある寫眞、家庭全部でとつた寫眞などに就いて、くはしく書かせる。説明的になつてもよい。

キモノ

着物、えりまき、外套など、いつ、誰に買つてもらつたか、どんなに大切にしているか、どうしてよごしたかなど書かせる。

二月

マメマキ

誰が豆まきをしたか、そのときの様子、その夜のこと、うちの人たちの年齢のことなどをくはしく書かせる。

キゲンセツノ日

式のこと、先生のお話のこと、何をして遊んだかなど。

ユメ

見たゆめ、ひとのゆめの話、どんなゆめが見たいかなど。

日ナタボッコ

ひなたぼっこをしてゐる時のいろいろな觀察。實際にひなたぼっこをさせて、詩の形で書かせてもよい。

學ゲイクワイ

學藝會の様子をくはしく書かせる。

三月

オヒナサマ

おひなさま、去年のお節供、お節供の御馳走、お客さまのこと、誰と何をして遊んだかなど。

オカアサン

地久節、母の日に聯關させて、おかあさんをよろこばせたことや、どういふ時にどういふことをしたら、おかあさんがよろこばれるだらうといふやうなことを書かせる。

ウグヒス

うぐひすの様子や、鳴き聲などに就いて。その他の小鳥のことでもよい。

二年生ニナル

二年生になる楽しさ、うれしさを書かせる。「二年生になったら」といふ氣持を多少感想風に書かせるのもよい。

話し方指導要項

指導の發展段階

第一期

児童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。又人の話を注意して聞くやうに仕向ける。

第二期

児童の見たこと、聞いたことなどに就いて、順序だてていへるやうにし、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聽く態度を養ふ。

第三期

自分のいはうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

第四期

同じ話でも、相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、又男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。
なほ、話をしたり聞いたりするときには、相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心がまへを養ふ。

初等科第一・二學年

指導要項

(一) 話し方は、読み方指導を中心に、これが基本的指導をなす。そのため特に左の事項に留意する。

- (1) 読み方、話し方を一體と考へ、読み方の教材たる挿畫(掛圖)文章等を中心として、話合をさせる。
- (2) 話合に於いては、すべての兒童に話す機會を與へることにつとめて、言語發表を盛にし、これを適正に指導する。
特に言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、適當な方法を講じ先づ氣輕に話すやうに仕向ける。
- (3) 読み方教材を通して、正しい發音、ことばづかひになれさせ、教材を朗讀、暗誦すること、言語を身振にあらはすこと、對話を實演することなどにより、正しい話し方に導く。

(二) 話し方は、綴り方指導に於いても、これが積極的指導を行ひ、特に左の事項に留意する。

- (1) 綴らうとする主題を中心にして、兒童の見たこと、聞いたこと、考へた

こと等の話合をさせ、言語發表の修練をさせる。

(2) 綴り方を單に書かせるだけでなく、それを朗讀し、また聽くことになれさせ、またまつた話をしたり、聽いたりする修練をさせる。

(3) 兒童の綴り方を中心として、いろいろな話合をさせ、これを話し方として適正に指導する。

(三) 他教科、他科目の指導と聯關して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 修身、禮法と聯關して、挨拶、返事、姿勢、態度等の躰をなす。

(2) 音楽と聯關して、發音、發聲を正すことにつとめる。

(3) 理數科に於ける觀察や作業と聯關して、事物、事象とことばとの正しい結合を圖り、正確な言語の使用に導く。

(4) 兒童の圖畫、工作に就いて、自分の經驗や思つたことを發表させ、話し方の修練をなす。

(5) お話會、學藝會等に於いて、他教科、他科目の學習、諸行事、童話、讀物等を

話題として、大勢の前で話すことの初歩的指導をなす。

(四) 話し方の指導は、兒童の生活のあらゆる機會に於いて行ひ、常にその場その場に於ける言語修練に留意する。

(1) 特に初期の話し方指導に於いては、教師は兒童の親しい話相手となり、話の誘導者となり、又兒童相互の仲介者となつて、すべての兒童に氣輕に話す機會を與へることにつとめる。

(2) 教室に於ける問答、話合はもとより、教室外に於けることばづかひに就いても常に留意して、一般的または個人的に指導する。

(3) 教師はつとめて醇正なことばを使用し、特にこの時期では、丁寧なことばづかひをして、兒童をして知らず識らずの中に、それに倣はせるやうにする。

(4) レコード、ラジオ等を選択利用して、正しいことばになれさせる。

(5) 家庭と協力して、挨拶その他日常語を正しく使ふやうに躰ける。



昭和十六年四月三十日 印刷
昭和十六年五月二日 發行

(非賣品)

著作權所有

著者兼
發行者

文 部 省

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者 大 橋 光 吉

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 共同印刷株式會社



